

Title	結界の構造と表現に関する環境論的研究
Author(s)	垂水, 稔
Citation	大阪大学, 1989, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/36743
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名・(本籍)	垂	水	稔
学位の種類	工	学	博 士
学位記番号	第	8725	号
学位授与の日付	平成元年5月1日		
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当		
学位論文題目	結界の構造と表現に関する環境論的研究		
論文審査委員	(主査)		
	教授	東	孝光
	(副査)		
	教授	末石富太郎	教授 笹田 剛史
			教授 橋本 奨 (平成元年3月31日退官)

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、仏教用語として渡来した「結界」という言葉から抽出された領域および境界概念を使用し、われわれをとりまく環境の中に見いだされる通時的・共時的な結界表現の諸相とその構造について考察を加えたものであり、序章と本編5章および結章からなっている。

序章では、「結界」という用語の規定を含め、本論文の目的と構成について述べている。

第1章では、環境における結界表現の種々相全般について考察を加え、空間分割装置ないし境界表示装置としての結界と、結界によって分割された空間・時間領域について整理、考察している。

第2章では、滋賀県高島郡朽木村を事例として、村落空間における結界表現について考察している。ここでは、村落空間における社会的結界の構造について分析し、さらにその空間的・時間的表現としての村境の表徴について考察している。

第3章では、都市空間における結界表現の予備的考察を行い、都市空間解読の視点および都市空間と村落空間の比較考察の視点として、有標化と無標化および無名性の二つの軸を提案している。

第4章では、都市空間における結界表現の原型として、中世以前の京都を事例として葬埋空間および祭祀・祭礼空間に関して分析を行い、呪術的結界の構造における村落的性格から都市的性格への質的変容について考察を行っている。

第5章では、都市空間における結界表現の展開型として、近世以後の京都を事例に、町内における制度的結界の構造と変容過程に関する分析を行っている。

結章では、以上の結果を総括し、現代都市における結界表現の評価を行っている。

論文の審査結果の要旨

本論文は、際限なく拡大し無秩序化していく都市空間の現状を改善する手だてとして結界概念による都市空間再評価の必要性に着目し、結界の構造および現代にいたる変容過程に関する研究の成果をまとめたもので、その主な成果は次の通りである。

- (1) 村落空間の制度的結界の分析を通じて、その特徴を村落内部に対しての徹底した無標化指向にあることを明らかにし、また、このような村落は村落外部に対しては自らの優位を示すため有標化する構造を持っていることを明らかにしている。
- (2) 一方、このような村落空間の結界のあり方に比べ都市空間に於ける特徴が有標化であることを明らかにし、この点について京都を事例とし、日本の都市は村落の無標化と都市の無名性を両立させる別種の空間と位置づけている。本論文では、これを「マチ」ないし「大いなるムラ」としている。
- (3) また、日本の都市の結界としての中世以前の祭祀・祭礼による呪術的結界の分析を通して、その構造の中に村落空間における虫送りや道切りの儀式と同様の構造を継承していることを明らかにしている。しかし、質的な変容をみると、村落空間では単一の氏神祭祀であったものが、都市空間では多数の氏族、階層、職種の人々が祭るといった契約神的な意味あいの濃いものに変容していることを明らかにしている。
- (4) さらに、中世以後の都市空間では、特に町内において法度に代表される契約的結界が社会を維持していくうえで重要な役割を担っていたことを明らかにし、それが都市空間や都市景観の美学形成に非常に重要であったことを明らかにしている。また、こうした美学形成の仕組みが現代都市において喪失していることを指摘している。
- (5) 最後に、以上の分析結果をまとめ、無秩序化に向かう都市空間の現状を改善するためには、ゆるやかな切断のできる結界の仕組みが必要であることを指摘し、それは部分的な結界がすきまを持ちながら累積して都市の全体を構成するようなシステムであると提案している。

以上のように、本論文は都市活動の効率化に主眼を置いてきた近代以降の都市環境計画に対して、市民的合意を内包した我が国の伝統的な町づくりとしての空間分割様式を現代に再解釈することを可能にしたもので、今後の都市空間形成手法に対し有用な知見を与えており、環境計画学上寄与するところが大きい。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。